

命のひたむきな営みを実感し ルールを発見・創造しながら愛することを学ぶ

安部富士男

はじめに

安部幼稚園は創立43年を迎えています。

横浜市郊外の丘の中腹にあって、設立した43年前は、園庭に立つと、田畑、雑木林に覆われた丘、牧場の見える田園地帯でした。現在は住宅に囲まれていて、この地域で子どもたちが遊べる雑木林は園庭だけになっています。

3,000坪の園庭には、サクランボ、ヤマモモ、ビワ、ウメ、アンズ、グミ、クリ、ブドウ、カキ、ミカン等の果樹、畑やヤギの牧場もあります。スクールバスはありませんので子どもたちの大半は小さな班を作り親子で通園しています。

年少組は1クラス15名前後の4学級、年中組は1クラス25名前後の3学級、年長組は28名前後の4学級で構成されています。各学年には学級担任の他、それぞれ2名ずつフリーの教師がいて一人ひとりに心配りしています。担任が体調を崩し休む場合も、子どもたちと関わりのあるフリーが代わりにクラスに入れる体制を整えています。経営的には苦しいですが、子ども一人ひとりのいのちを大切にすることは教師のいのちを大切にすることだと考えているからです。

自主的な父母の会活動も活発で、自然と関る活動もあります。放課後や土・日曜日等休園の日には園庭を地域に開放しています。地域の方々が動物に餌をあげたり、雑木林の丘で子どもたちがカブト虫やクワガタを捕ったり、遊んだりする姿を見つめ、交わりを深め合うことを大切にしています。遊びに来た子が捕ったカブト虫やクワガタは、元いた処に返してもらいます。子どもが動物に餌をあげる仕草や表情を見つめて『可愛い』と実感できる親や教職員と共に、自然の恵みを生活に取り入れ、四季に寄り添って生きる幸せに感謝しています。

1 自然に励まされて生きる

私は、保育現場にいて、保育者・教師が、とりわけ、園長・校長が、日々の生活の中で、命あるものの『いのち』の営みに心寄せて生きていることの大切さを感じています。

その営みに励まされて自らの人生を紡いできたという実感を園長や教師が持っていることが、飼育活動を豊かにする土台の核をなすからです。

私が高校1年の時、弟2人と母が中毒事件で

他界しました。母が生活を支えていたので仕送りが途絶えると、私は行商して学費・受験費用を稼ぎ、大学に入りました。生活苦と母を失った悲しさを、自然を見つめて俳句に具象化し、自然の営みに励まされて耐え、淋しくなると乳幼児と遊び、幼い子どもの世界の面白さに感動して、自分の想いにそった幼稚園を作って、子ども・教師・父母に学びながら、保育・教育の勉強をしていこうと決心しました。

暁の虹のまどかさ蝸斗(カト)生(ア)るる
湖(ウミ)に立つ虹を崩して蝶渡る
雪晴れの金魚の影に飢きざす

ふじお

人生に想い届し沼畔を歩いていたら、早朝の虹のまどかさに感動しました。ふと足許を見ると可愛いおたまじゃくしが生まれていました。

群れ泳ぐ蝸斗のひたすらさに励まされました。教職員が、自然に寄り添って生きる心地よさ、小さいいのちのおしさを体験することが、子どもの『いのち』発見に共感し、飼育活動を保育・教育に位置付ける土台だと考えています。

2 飼育活動の意味を先駆者から学ぶ

次に、保育・教育を構造的に把握し、飼育活動を、総合活動・総合学習の視点から、子どもの発想に依拠して展開していくことが大切です。大学院時代、私の研究課題は生活教育でした。大正時代、教育界のベストセラーになった「分団式動的教育法」の著者・及川平治は、明石女子師範学校(現・神戸大学)附属小学校・幼稚園の主事として、感情・情操を豊かに培う為に、教育方針の要に野遊びと飼育栽培活動を位置付け、カリキュラムを構成し、実践していました。彼は地域を教材化することを重視し、それなしに動的教育は実践できないと考えていました。

例えば「トンボの生態」を学ぶ場合も、先ず教師が学校周辺を調査し、子どもたちがトンボと出会うにふさわしい場所を選定し、そこに子どもたちと素手でトンボ捕りに出かけました。トンボは中々素手では捕れません。その体験を子どもたち自身が振り返って小集団毎に論議し、その内容を学級に報告し、捕虫網や飼育箱

が必要であることを確認します。それぞれ、自分で、それらの設計図を作り、必要な道具や素材を用意し手作りの捕虫網や飼育箱を作りました。それを持って、また、トンボ捕りに出かけました。

自分の目・耳・肌で捉えた体験を、自分の言葉で、時には、絵や雑材で作った模型など自分の手で作った造形物を手がかりに、小集団や学級に相互に報告し合って、教科書も参考に、トンボの生態への理解を深めていきました。

私は、諸外国の教育実践や思想とともに、日本の風土の中で培われた先駆者の実践と思想に学び、子どもの意見表明を軸に、教育・保育を創造することが大切と考えています。

安部幼稚園では、及川たちの実践の系譜と理論を大切に保育に取り組んでいます。

園では、現在、ヤギ4頭、ウサギ3匹、チャボ6羽を飼育しています。

3 飼育活動を生活の中に位置づけて

2006年4月19日、若い母ヤギ・こゆきに双子が誕生しました。こゆきは、双子の赤ちゃんの耳や鼻、口や頭、とりわけ黄色い胎便が出ると肛門を丁寧になめ、あごで子ヤギを乳房の方に誘導します。子どもたちは、柵に群がって親子のかかわりを見つめていました。子ヤギがこゆきの膝を吸うと「そこはオッパイじゃない」と声を掛け、子ヤギが乳房を探り当てて乳を飲み始めると、子どもたちの緊張感が解れて、それぞれ、『よかったね』という表情になりました。

親子の山羊の関りを見つめることは、子どもの中に響き合う関係を培う一助になっています。5月は園庭でサクランボ狩り。3才児は教師に抱かれて、4才児は教師に支えられて梯子を登り、5才児は教師の見守る中自分で梯子を登り、自分で収穫して自然の味覚を楽しみました。その喜びを貼り絵にしたり描いたりしました。6月はビワの収穫、仲間と分け合ってその場で食べるだけでなく、ビワゼリーを作って、親子で遊んだ後、木陰でいただきました。

飼育する特定の動物に子どもたちの課題を閉ざすのではなく、大根畑の土づくりに取り組む中で幼虫を見つけ図鑑で調べたり、雑木林でカブト虫やクワガタを捕まえて飼育したり、森にお化け屋敷を作ったり、絵本やわらべ歌を楽しむ生活の中に、ヤギ・ウサギ・チャボの飼育が自然に根づいていくことを大切にしています。

そのような生活の中で、子どもたちとヤギとの関りが深まり名前を付けることになりました。

4 子ヤギの名前を考え合う

生後1ヶ月頃、牧場を駆け回る子ヤギの可愛い仕草を見て、子どもたちから名前を付けよ

うという意見がだされました。早速、年長集会を開きました。名前を付けようと提案すると、テレビ漫画のキャラクターが次々に飛び交うので、教師は「名前を付けるって、どういうこと」と問い掛けると、皆一瞬静かになって教師に視線を向けました。「皆の名前は、どうして、優ちゃんは優子、賢君は賢治になったのかな？お家の人に聞いてきて」と課題を投げかけました。

翌日、各学級で自分の名前の由来を報告し合って話し合い、自分たちの学級の意見をまとめて学年集会に望みました。各学級から出された名前案を教師が板書し、名前に託した想いや願いをそれぞれの学級の子に報告してもらいました。「良い名前が沢山出たけど、子ヤギは2頭しかないよね。どれの名前にするか、どうやって決めるの」と問い掛けると、皆で自分が良かった名前に手を挙げて、手が一番多く挙げた名前にしようということになりました。

多数決で双子の名前は「ゲンキ」と「ダイチ」に決まりました。話し合いの過程とその名前に託した子どもの想いを学年だよりに綴り、わが子の名前への想いを子どもたちに話して下さった家族への感謝の言葉も添え、家庭に返しました。

5 折合いをつける体験を通して、待つ力を育み、ルールを発見・創造していく

動物係は年長組が学級単位で取り組みます。曜日によって担当する学級が変わります。それぞれ自分で世話をしたい動物を決めて自由にかかわります。勿論、子ヤギが生まれるとヤギ係が多くなる傾向があります。一つに偏ると、ウサギやチャボはどうなるか、それぞれに考えさせて自由に選択し、役割を決め仕事に取り組みます。「チャボだって可愛いから、今週、チャボの世話をし、来週、ヤギ係をする」それぞれの可愛いところを体で感じていると、年長児は、折合いをつける力も身につけていきます。

小屋の掃除、餌やり、散歩など、自分でやりたい仕事に取り組みますが、そこでも折合いを付け合うことを大切にしています。小屋の掃除にしても、掃き掃除、ジェットウオターで床の便を流す等、順番を自分たちで決めて取り組みます。チャボの餌作りにしても作りたい子が列を作って順番を待ちます。包丁で野菜を刻むのですが、沢山並んでいるのに何時までも刻んでいると「未だ沢山並んでいるよ」と声がかかります。「あと10回、(包丁で野菜を) トントントンって切ったら替わるよ」「10回じゃなくて5回よ」「じゃあ7回ね」といったように話し合って解決することを大切にしています。ヤギの散歩にしても、散歩係が多くなると、トンネル(雑木林の尾根に草のトンネルがあります)ま

では僕たち、帰りは君達といったように折合いを付けます。トンネルの近くの小楯にヤギを繋ぐこともあります。繋がれたままヤギはおいしい草を食べています。子どもたちは暫く枝から吊された手づくりのブランコで遊んだりします。

ブランコの列に年長児が横入りすると「順番だ。後に並べ」と注意していたのに年少児が突然先頭に入ると「今日は良いけど、これからは、後ろに並ぶんだよ」とブランコに座らせて後ろから押してあげています。「掃除終わったぞ」「ヤギの散歩、お仕舞い」という叫び声に、帰りは別のメンバーが散歩させたりしています。

私たちは、子どもたちが自分の願いをはっきりと主張し、対立したら自分たちで折合いをつけ、自然にルールを作りながら、仲間や動物と共にある生活を楽しむように仕向けています。

動物と関る生活の中で、可愛いという感情を豊かに体験し、可愛いという想いを支えに待つ力を培い、ルールを発見・創造し、仲間の気持ちを響き合うように理解して、おもいやる力を身につけることを大切にしていきます。

飼育活動に取り組む子どもたちを見つめ、私は、子どもたちが、体験的に待つことの意味を理解し、社会的ルールを発見・創造する中に、愛することを学ぶ場があると実感しています。

6 教師の姿を手がかりに生と死を見つめる

当園で誕生し、11才になったウサギのモモコが、1年ほど前、前足に瘤ができたので、掛り付けの獣医さんに治療していただきました。その瘤は腫瘍でした。次々に転移し、そのたびに摘出手術をして、遂には、前足、後足が殆どない状態になりました。瘤を最初に発見したのは子どもでした。子どもに「モモコの足がおかしい」と指摘されて教師が触ってみると足をピクッと動かすので、早速、動物病院に連れていきました。最初に瘤を摘出してからは、他のウサギとは隔離し、世話も教師がするのを子どもたちが見守ることにしました。獣医さんから野菜の他に栄養価の高いリンゴ等もあげるようにと言われたことを報告すると、子どもたちも家から持って来ました。教師たちは、体に糞尿がつくので、毎日、暖かいお湯でモモコの体を洗い、きれいなタオルを布団がわりにして飼っていました。家庭から「子どもと風呂に入って背中を流してあげていると、モモコの世話をする先生方の様子を話してくれて感動しました。『モモコがいつまで元気であると良いね』とつぶやくわが子に優しさが育っているように感じました」といった手紙がいくつも届きました。

ある時、モモコのケージの前に女兒が二人肩を寄せ合って屈み、モモコを見つめ、まるで子

守歌のような口調で静かに歌っていました。その子どもらの姿とモモコの世話をていねいにする教師の姿を重ねて、私は不思議な感動を覚えました。

遂にモモコが他界しました。子どもたちと一緒に雑木林の中にお墓を作りました。埋葬する時、何人もの子どもの頬に涙が光っていました。半年経っても『ももこのはか』と子どもが書いた墓碑の前に四季折々の草花が飾られています。『いのち』を大切にする日々の営みがあって、子どもたちは、死の淋しさを実感するのだと考えています。『いのち』の営みを体で受け止めた経験が、死を捉える感性の質を規定します。

7 飼育活動を総合的学習のコアに生かす

2006年度は、双子のヤギの誕生、わが園で生まれ子どもたちに可愛がられて育ったウサギ桃子の死、人間で言えば80才を越えるヤギのバンビの介護等、多様な経験をした年になりました。

私たちは、毎年、年によって形は違っても、ご家族の方々に子どもたちの園生活を理解していただく為に生活展を催しています。

絵や貼り絵、劇、そこに登場する歌の中に、動物が登場しない年はありません。

今年も、正月遊びが一段落した1月中旬、生活展が間近に迫ったことを子どもたちに話すと、去年の年長児が取り組んだ劇を思い出したのかもしれませんが、年長組では、小さい組の子や父母に劇を作って見せようということになってクラスや学年で相談し「どうぶつたちのまちがいぼうけん」という物語を作りました。

そこにも、ヤギ、ウサギ、チャボ、ザリガニ、カブト虫、クワガタ等の虫が登場しています。

8 親が動物に関する楽しさを、わが子から学ぶ

私が脊髄腫瘍を摘出し退院した時のことです。偶然、門の前でMの母親に会うと「おめでどうございます。園長先生が長い間入院していた時、ファミコン仲間が家に集まって、それぞれ勝手にファミコンに夢中になっていました。

「小春日よりだから外で遊べば良いのに」と思って子どもたちを見ていました。暫くすると、一人が「あっ！日曜は、園長先生がいないから『お腹、すいた』ってヤギが鳴いているかもしれないぞ」「僕たちが餌あげよう」とファミコンを止めて幼稚園に向かいました。車が多くて危ないので、私もそっと後からついて行きました。子どもたちは顔見知りの八百屋さんに寄って『キャベツの葉、ちょうだい』と声をかけています。「偉い！日曜日でも動物の世話をするんだ」とほめられてうれしそうです。ダンボール一杯に野菜屑をいただくと、箱の四隅を持って

「ヤギ系の歌」を大声で歌いながら園に向かいました。その姿が子どもらしくて、誇らしげで嬉しかったです」と話して下さいました。「幼稚園に着くと、牧場に鍵が掛かっていました。どうするのか見ていると、一人が柵の外からヤギに葉をあげている間に、柵を登って中に入り外の仲間からキャベツを受け取り、餌箱に入れています。2頭のヤギが食べ始めると、皆、柵の中に入って「食べ終わったらブラッシュしてあげるぞ」と話しかけて柵の外に出てきました。ヤギを見る目が可愛いく、嬉しくなりました。わが子が駆け寄って来て『お母さん、ヤギは、こうやって食べる』と下顎を左右に動かして教えてくれました。すると友達も下顎を一斉に動かして地面を四つん這いになって歩き始めます。その仕草が面白くて、子どもたちもヤギも可愛いくて、私も、子どもたちからキャベツをもらってヤギに餌をあげました。

親も教師も子どもたちから動物と関る楽しさを教えられています。

9 地域に開かれた園づくり・学校づくりを

Mの母親が「安部幼稚園は、何時来ても、親子で遊びに来ていますね。2才位の子を連れて遊びにきたお母さんに、Mが『このキャベツ、あげるから、赤ちゃんとあげてごらん。喜ぶよ』と野菜を差し出すと『ありがとう。優しいお兄さんね』とほめられて嬉しそうでした」とも話して下さいました。退院したばかりでしたが、その話に生きる勇気をいただきました。

先日の日曜日のことです。親子とも卒園生のSが、家族で園庭に遊びにきました。私を見かけて「園長先生、お元気で嬉しいです。仕事がついて疲れると家族で幼稚園に遊びにきます。昔、ヤギ係したことを思い出して、子どもとビワの落ち葉をあげたり、子どもが森で遊ぶのを見ながら日だまりの落ち葉の上に腰を下して、雑木林の梢をぼんやり見上げていると疲れがとれていきます。幼稚園に来ると癒されます」と話すので「また来てね。語源辞典でSchoolを調べると『癒されながら論議を楽しむ処』となっているから、安部幼稚園を訊ねて来た人が雑木林や牧場で『癒される』と話すと嬉しくなるんだよ。健康に注意して、家族で、また、来てね」と話しました。T君は、私を見つくと駆け寄ってきて「僕がヤギ係の時、バンビが生まれたんだ」「そうだったね。そのバンビも14才、すっかり婆さんになった」と話しました。T君が、卒園式の後、バンビの頭や背中を撫で「風邪、ひくなよ」と話しかけていたことを思い出しました。

小さき手で山羊の背を撫で卒園す ふじお

芹が谷中学校の2年生(昔は3年生)全員が、家庭科の授業の一環として、毎年、安部幼稚園に遊びに来ています。年長児が、中学生にウサギやチャボの抱き方を教えたり、散歩の時、中学生がヤギの『たずな』を無理に曳くと「首が痛いよ。口の前に餌をやれば曳かなくても歩くよ」「ウンチは野菜屑と一緒に堆肥の箱に入れるの」「チャボの野菜はもっと小さく刻むの」と話しています。中学生が上手に刻むと、尊敬のなまざしで見つめています。その雰囲気、中学生の自尊感情を培っているように感じています。永谷高校の保育専攻の生徒も、芹が谷小学校、芹が谷南小学校の児童も、園庭に遊びにきています。とりわけ、安部幼稚園が地域の乳幼児を持つ父母や祖父母の憩いの場となっていて、幼い子と一緒に四季の移ろいを体で感じ、自然に寄り添う心地良さを実感し、牧場でヤギやウサギ、チャボ、雑木林や野原でカタツムリ、テントウムシ、カブト虫、クワガタ、セミ、トンボ、チョウ、クモ等と関わることのできる場になっていて、大人も子どもも、いのちのひたむきな営みを実感できることを大切にしています。

先の事例からも、ご理解いただけるように、私たちは、動物飼育の過程で、子どもたちが、遊びを楽しむことを重視し、世話の段取りをめぐってルールを発見したり、子どもらしく創造し、相手の気持ちを理解しながら、待つ力を身につけ、愛すること学んでいくと考えています。

子どもをめぐる悲しい事件が多発する中で、飼育活動の実体験を、子どもたち、地域の大人たちに保障することは、学校各階梯における必須の営みであると考えています。

最後になりますが、このような視点から綴られた次の著書を読んでいただくと嬉しいです。

(学校法人安部幼稚園理事長兼園長)

参考文献

- (1) 安部富士男著1980年「幼児に土と太陽を」あゆみ出版(現在新装版を新読書社が出版)
- (2) 安部富士男著1983年「遊びと労働を生かす保育」国土社
- (3) 安部富士男著1984年「子どもに強くやさしく生きる力を」文化書房博文社
- (4) 安部富士男著1989年「感性を育む飼育活動」新幼稚園教育要領をどう読むか(日本保育学会論文集)あゆみ出版
- (5) 安部富士男著1992年「子育ては子どもの心に寄り添って」あすなろ書房
- (6) 安部富士男著1993年「子どもが愛され理解される保育」国土社
- (7) 安部富士男著1999年「新版感性を育てる保育」新幼稚園教育要領を生かす新読書社
- (8) 安部富士男著2003年「ちょっと気になる子の保育・子育て」新読書社
- (9) 安部富士男著2005年「人との交わりを支えに生まれた幼児教育」新読書社